

能譜古集辨全

中村俊定文庫
文庫 18
668





俳諧古集之辯

序詞



費桃溪



我々又昔松子弱冠にして性おのほく滑枕を好
 るり壮年及て又濃飯み添添一書い之れ社
 老仙の類するもの物くこくを春の歳のことく言ふ
 其味乃心風を肯いけり月か雪を添添其情を
 遠境乃風をみまをを通へ近里の社友を指
 押するも年ありとを志のこころめこころ
 法は少く已れありそのちそつ義乃俳諧も然り三



國の世に衡を何しとふらとてこらたまはくはくしたる
めを難波みあはぬらとてなをくともまはれ
けしとやいより羊の毛を様をいふて好て古國の
をあせり鳴呼集書集治礼と命あのあるりて
皇と又祖用と殿のたを人言ゆるう殿をきく
人まかあうらんよりよ乞そのりこそ元孫中しれ
能集と講せしむる門人等その傳説を事受
せる物とて庫よりとて幸ある本とて在籍一
百の古遠に心あたせぬは世籍と世公りこそ

み不朽の光をかたけの月と後古の真主ともあはくは
報恩謝徳とていふやありぬとて解庶ははるあな
らちみ讀めまむれと強強かして敢て隊せん志は
あうり義を足せさせるも勇あはれを國外のいハ
君父の命とりまたさるた権さかあはくは霜は様
は灰と集の編とていふと刺刺か様を伝くぬれはく
とに湖の慈君さる事と許して一関の日あはくは
は官見摸象の説を笑ておぬて心中は確證を
美しめんとをさあはハ世系のふはあはくは

その道中客ありとせさくんわきしふるまふまふありとあら
寛政五年の旦少くく睦月日

辨古集本大綱

其も辨諸の二字といひも延喜の御代に於て集本監編
して和舟の一種といふなりけりとてさして其名をさるるの
式を制して石勅を法りりしるを法りぬるをたぬ
是もおもるるに隔りて文明長亨の頃にもあつたそのち
歩祥の宗通ありて之を慈の巧人よとせしとて造化に

なれ我を樂されい其愛いもた令かつたとしなはれ
昭代文物の制をあるいりて宗祖芭蕉の翁伊賀に
産し武陵に隠居して漢土の史記に説文ある多智
系曲の偽譜をとこく言傳と人傳とをなれとて
あつたきよら風を弘め行ふ其道たるや儒佛老莊の各實
を採擷して終矣視練に一流をなれハ才一世情の人を
しりありしきハ俳諧の名と志よく寐しきハ風持乃
體と志るしとよ此三條の各別ハ白馬の建門の
大まきあるよしまく南門の各同めりて身はす

いえる姿先情後の教あはれは新舊の差別は明か
法はよし新式法全率のむりしを融けし俗中の特をい
あい路いししるつ葉月廿五日の年かむいしる
遠きハ椎の葉乃糧を法と近きハ杏花の酒を法
えりそ日の氣を追はしとふことあかりしとそさるる
廣く同好の葉詞と葉め連席の尋行を録し
持り綴たる物今あを存せり法は百載の下古人の所
と窺いおのの好たる所以を志ふこと是なる至寶
あんやさしハ獅子巻ハをせし親交ししりし更し
美鶴と牛の宗師として流布變化ハ時ハ促しとを
此のすよよとふとふとあうんきうよ社中ハ風俗を
見るに古を承ハ事すもべきかたをそよめもぬぬま有
そいふ所の俳諧ときくけハ姿先情後の論ハ及は浮世め
たる之語ハ流布てもく風雅の神とあせる淋しとを
さしん又たぬくハ叙ふ人もきくハ詞の古雅をまじ
ね風花月の神ハ他ハとあそい俳諧の名とあせるわしとハ
もふれたんしハ川も世道の本本あそい條の遺法ハ美し
しるるしハふあういししを標しそ今と昔の趣

但愛ふハ物ニ感〜一言ハ愛ハ感昂余情とあり
予言昂汝ハ此川ハ一寸の上ハ汝情を伝ふ志ハ情の
先あるハ似た凡と情ハ万物ニ情ハ〜こさあ〜の愛ハ情の
〜そあ〜の情を生きて凡ハ先後ハあて二貫と志〜とた
情所と〜ものハ取能として求むやすも汝の意向とこし
志ておのの〜お爲てあ〜ぬこす情の物好をおんハ人ハ
耳ハおえぬかちあ〜んか〜是情と好むことハ情ハ私のお
味あ〜ん〜と〜夫と籠〜と〜還質とも存く〜といハ
体よ汝ハ情〜と情ハ深〜と〜物た〜と〜吾と凡との

さういり〜と世法ハ之備の末しハ一條ハおあり保ハ後笑
諷諭の傳説を〜して天下の一時と存するも臣ある哉
虚實を昂陰陽の支儀ハ〜と傳説のお契た〜所合の
既ハ不致ハ軽〜と〜んさ〜底の老費と并せ〜と
何れそ所合の趣向を定む〜と〜天の今日急用あると知る
る〜と〜と并せろや交通せ〜と〜徹底を即ハ明を
さ〜ハ述じや〜と〜二子之友ハ精神と厲ま〜して百錬ハ
船せ〜んや〜に〜への所合〜と〜るよ〜分林ハ虚實
あ〜ハ心志の老實あり〜と〜折ハ面と信〜と〜せ〜也

句神の者実といふハ先師名家の法諦めしを名目と罷
説されハ和公傳する人もある一ハさるハ文字ハ者字實
字のとき句神ハ動靜の數たつあるをいふなりを其
句意の者実といふも周祿く人の志ふありてこれら
化ハ卷を貫ぬけハ講するハ名をしてたしかたき
神用親跡換骨子奪と場ノ様變ハ態一ハ在る
みいおせれと皆そ者実の換名あるを志す一ハ在るハ
此ハさし句神も者実ハ本々同神ありハ在るや一般
ありて越のさ神の者ある時ハ附句のさ神と実あり
實ある時ハ又者ある志むる者ハ常ありハ在る
及さしハ者といはるを實とありて此のさしハ在る
てハ神公の人世を志ハせんやハ者ハ虚を附ぬハ在る
者たちハ地実とあり實ハ実をさぬハ在る者ハ
あるの妙古集ハむくハ在る一ハ者ハ虚を附ぬハ在る
十論ハ口傳とあせる虚實の者実もけとありて云徳不到
の者あるをかくありハ説破する時ハ未熟の族のいひあり
ありて却て道と實とハ近くありて云せざる時ハ在る
實もとも古集の者実ハ難通一ハかたうハ彼の庵居士

う遺言のしるはくハ世の所有を空しくして不意を以て其とせし
くはといひしけるを其

変化と地を先とし節を次とし曲を中との変相あり
とハ一巻の配りをいふるありても所合の変化ありては百韻
而百変あるを趣を識得せしむと句面の變を滞ては佳ぶれ
難ふハ越かたかへりしり、変化ハ所合のとりてを變化の
骨肉といひんぬ云大名の抄越ハ穂法瓶を趣向し、法藏系
をいひ、この思懐ハ轉じたるともまはもやうの變化あり、こ
を變化の皮毛といふを、其かるハ社オ一の所合をとりてハ

人倫の三方目といえハ後病の尻馬のうて未練の之障あり
やあ、ぬるも其種も益もなり、山や川とも橋ともはく舟ハ
是非あり、内ハ外ハ、そそ自然を失ふとくハ自己の拙
拙より運じハ規矩の定れハ多うなく我書後やふ知欠の
あ、ぬまくとそもけ次ハとあ、んそ次とからんかと思つ、ハ
美ハぬものう、保函し、足る人ハあ、さやう、これハの弊
も皮毛の變化をも勢として趣の余儀の偏重あり、未だ
とく起れるあり、いハまや貞享の古今抄もあ、う、同好く
の迹方さ、ん、う、ま、く、う、の、さ、い、を、う、人倫あり、さる、の、あ、

此を主雜獨あといえられたる人倫の事として人倫
といはれたる自他ありちあつたるを考へて法創はせ
ておぼゆるべしとせ

句格の事、古今未だ教在せしものとて、まほしき
ありしむさハ托物といひ比興といひ換骨と奪の左發
あはれ所附属の委曲ありつれし漢家の文法、教ふる
あるハその二句をかしめて後の一句をばけ、あるハ後の二句を
合せし前の一句を附たるあり、客語ありし世ハ其教に
かたし二句一神と一意一章といハ大同小異ありて終ハし

まほしもの程をち能ふせしんハあるべし、次又後附あるも、
まほし海に固ぬし、まほしハ乞と奪のまほしありしと
志川や且人間文游のまほしより山川草木樹の風色と、
おぼゆるし二句をハ控へんお歌、上下のありしと、詩格
起義のありしと、まほしは市物語の西氣は詩古
の裁入と、まほしは山崩しと、同じくぬを、まほしは
空しく着るし、おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、
まほしは、おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、
おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、
おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、おぼゆるし、

そ月の用あるをいふは、さき雑を採りて他の事をばた
又世事をうけつたの事ありつせよのたくりつれも変化の用を
るをいとちていふは、さき雑を採りて他の事をばた
とやいふは、さき雑の教とていふも、聖賢の教とていふ
極々の教と結ぶ。機変の自在に、さき雑の用を
こぼし、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
教ありん況やあり、の身仙武を二花二月の掬あるより
和折の月葉のせり、さき雑の用をいふは、さき雑の用を
句作の風の自然とていふは、物の自然なるのまじり俗はま
法をいふは、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
あるは、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
高し、轉するは、便あり、さき雑の用をいふは、さき雑の用を
いたるは、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
行ていつれも、物の用をいふは、さき雑の用をいふは、
花より、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
欲して、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
風貌の優美あり、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
句作といふは、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、
尾緒あり、さき雑の用をいふは、さき雑の用をいふは、

はおくしりしるをいせて迹分ちある能借といふは
りみそ智めと及く其思の温れを莫ふはさへあ十論
み趣向を先し一旬能をなすとこしつといふ方の姿を
目か足て定あへくあ方の用と目かあてさうと結ぶ
處は凡いしきうとと転倒して用とよと趣向とあはれ
論あふあ方の語とあるより別れしつゝの趣向とあはれ
用の類をまはいとて一旬を仕立凡い用ハ而能情と
あつて語の論とハのうまゝあるを

去嫌の事天系永隆物は身おのきくいもあつくま
部あるをや、相近きかのあうとて混して実證をよ
ことはいと、み水情の温れといひんまを別して古集を
見る人々ちて疎略の罪を課せんとんさ其間とあてい
あめハ貞享の式目かあうとて、みかよふ書はの美合も清
濁かあし、音刻み有きとて吟もその身たぬきあふれ
そあを志此とや

新しものハ大略遺稿の秘説より出たり見る人々傳の標
初み實をとくあふあせを儀れいとせるとなくれた世
古集を傳はるとハ傳及といひ醫門といひ古画の伎藝を

よるよる世若くししものしを思ふるかにうらやまの風雅
のこそことあうもやあとおぞまか入るる人のよきも人も
いふみわたるるハじさ川に候のあつちかめも積善候
儀も兼て賈とのふとあ入り川にせし物たきと縞きさ着
るよを凡そあひの及ぶあまも候と嶮山度か二百杖をよめて
そ及筋を尋ね候へ 根筋の熟選たるものハい川後宮
用候かしと変化と風雲の位あまうと 骨子も選ぶ
よくくす候も又玉を琢む錦と裂くはまたあく
さか候さるものありさるハ并薄も想像かハ川に不定
まくあかりし候もこの候の撰集を候と越後を候
されりよしといふあるふらまはして候はまか候情の先
後ハ勿論あう姿をくして其まをさるものよき情
より候請ふ山をぬせよまよと変化のぬふのよき味
深長あるものかあてハ合く右頸の候まはまあは候ハ
靴をとらたて候をかく候等 かんききりあうここ子
のこそ深遠を亦候して其家か入らんことを求るの階梯あ
くのもの岩の他の具と候とや候時天明あひのと
衣更よのうら首ね子杜哉扉日菴の南や曲不題す

猿 葉集

さるのねも刷しぬをりくく介 去来

さくくといぬおちたる風情を形容し得たささいわをさくく
更には先の及理無念の根柢風味を

刷しの清ハ人情めかして神の字ハ松文を添さん

一物さく風の木の葉 一つまぐら 芭蕉

風おあささく風の自抱をあらまつまの清微中の場あり
木の葉のあらいみさきの枯えハ葉一姿之由句竹葉波葉あり

役引の影かぬる川 こそえのめ 凡起

人論ハ轉ハ流神 ○此後たるたすち掃の交糸との及ていんら
るんふの用をさもとめすこと高ともいれ神ともいハるんハ又た

かといつるぬるを風ハ熱あつて振ハさむ空の味と造入るこを
實といひいれ利とせしむる ○虚實神用ハ更ハて換骨

子集もこの方の難をを説きたるあハる雲その運ハ教はるもの
有とも難をさくハ以下各同をさか志せん

たぬきをねとけ 條張のろ 史邦

山白田かせく男と人をくして肩ハ熱たる雨をいりて他地へ
立るの果と際へる軽きに今目ぬるをさる

まじく産み寄る遠かふる青丸月 蕉

射出くこおとらと変は山岳の破川寺あとも申

人めもくハ次名物ハ葉子 来

徒然草みかあそく伝あせる。唐のかかたの。産み梅子の木の
枝もたりハありたるまじくを落すかといハる世本あかり
ハハとあハる。さる面影をさるるを。 ○まじくハ轉ハ安を
とあるとす。先弓のふとけハとの旗中。あらハる。

書かくる墨繪ありしく秋ふれり

邦

菓子盆の梨子并轉凡。○熟きみふりて世を氷みたる
際者あといひ人号けし名物の画みしきあり

せきらるるよまらゆるやすの足代

北

けさ句自他ハれすといとも菓子のみかきさほきあるる
そ後きときてそさかまたこかたを祝く二句一辨ハ似て
奪い流るる是とよ木葉の跡と号く。○木葉ハにハたりて
中二句の梅排きり出つ。梅排ハ多経あり川ハ法の定みさるハ
似たりと早きんにかつ。ものも糸ささかそぬせりと昔

ゆるもそそこの内とまつらちり

来

その底と解と見え。ち足底の舟とる。勤行止観あよはく
たすことといふ有奇趣とほ川のうねのちしとる

望見こそめて年の月ぬく

北

貝ハ年世を教ふる。○此處きる旋あといひる。静果の地を下れる
風情ある人忽ハ浮世の言の耳ハ。梅排余情あり。節
きたる。後と更ハ出来とあしめる。望の一字好あり

あつ川たるまの祢こさの志たるく

北

爰ハいさる者あとの晴たるとそてかき慈をいひや。○吳佯もと
牛字ある。塵滅して午字とされる。まらる。時ハ寸志望とく
牛の呪ると替。こあへる。老の待こる。眠らて居たる。以をさ
いとこ申す。あれハ爰地といひ。梅排ハみ。柄あり

美苜谷の花せととち

邦

美苜谷ハちるといひ。又水と結る。蓮。○きり物のい
まうて。海地をとめ。あはれたる。雲みちり。あへ。淨梅の。五合とあはし

吸あハ先出木れされしさいせん

蕉

水仙寺ハ海苔の名。て肥後の産。あそ。蓮。又ハ木葉の。まてあ
と。と申す。あむる。まてあへん

と里なまよりち道かえけは

来

際よりこゝろあるの老れ轉凡先の字とこゝろあていら

この春も盧同の男はあつて

邦

供ある老をいいてち庭の人を盧同とせんとくくみの
階とさるをく。○盧同と唐朝と兼取の他考

さし本はきたる月のあちあ

北

か川さしはる枝の芽出せし風情あて居あつたきた
るの句としりあ

花ささし本も候あつて並ぶるは比肩のさし

蕉

いとちまじしと和の候まじ

来

所地のよ入をするかと思へるはなるさ集とこゝろ

いちとまじし二日の物も喰て是

北

子奪す。○いとちの候牛眼をつけて車力日備の候あつ
やちめ男の風情と階あせり句候の秋景を記す

雲もみさあを流めわのちか

邦

驍勇ある流さる人あと思たるは変化あり

火ともしあ言川はさるあまのち

来

幸芳ある意ありて用のはけし

ほとけまじしちの候はあち

蕉

寂實しふくく。○か、鞍の力を換わるとの又他の事まじつ
せよものとしみまじしを換寄するの及、記かして寺社の論あり

ふみ所にて例をきりしむは換骨の子細の次は

瘦骨のまた起をば力あま

時候のうつりゆくみ病を致くさぬ

隣をかりて車一川こま

橋のあさけみ送る風来るをまじ入たるもやうある

うき人を根殺極くくらせ

隣やまよせたと替しいらうみ入る書をとられば人

けしめあつたを双扉あ侍の風流をうさる

いまや別川の刀さ

入るをあらは換骨せしむは他をばあはれを所とらる

せはしきみ梳て改をかきし

と奪し。○貴人か集はとおめる本有庭の面影あとい

おむい切きる死くさい

世四句ふたつハハくして左右とも二句一解をい人偏のま癖をえが
勿論ふみ骨丈のさぬとほつねめさるるその二章のあつた又の
夜集る巻巻とてこ別を未相かうと枝排院味さけけ場や
光中の抱いあつて及も後往來曲ををあせりて其の
実しきあかもとあへや。○二句一解ハまよ一ま一章とて二句越
を論をるかくは通式

青天子有明月の影わ

湖水の秋廿比瓦のむ月あ

北

邦

蕉

来

北

邦

来

蕉

青天の待て物 アチカラを繋ぎ優遊の二方ハ急迫の情を
おとけり

柴の戸や若るまゝ盗れし。尋とよむ **邦**

アチカラの洞の和奇ハ似たるをく懸向したん。○柴の戸のまゝ
ハ盗をぞあいありしハ文將を崩せん。

ぬのこそあし風乃夕々 **北**

かくのとく隠れどもハ隠す所あをもハ必ず糸緯を加えん

押合て。腹てハ又きり。仮枕 **蕉**

あふの伺き情を起し夕暮の二字ハ腹を注いで今もハの如女扇と
又きたれ仮枕とハ枕半の趣向ある。何れをまをしハ及きの句
他ハ妻をこめて物あめさぬといぬ。アチカラハかくとのけはれ
と

きりりの雲のまた赤まの空 **来**

爰ハ一掃。物出とて、光氣をいれと之ハ時々の語を
又ん。○平流ハたり。やの各あるハ但又天地之間於妻
笠帯ハ平といハ古物ハよれいまたきり

一かま。鞞。はくは窓カ。も **北**

臨鑑の火氣のくつ川ると勢ハ待物師の居ハ近かる
ハ様多むの風情をよせたりん

枇杷のぬる葉。ハ木の芽。も。た。月 **邦**

一本一竹といふも姿をみるハ信あり



市井の物のみはしや。夏。の。月 **凡北**

春秋をハ市さるをいふ。ハ。○おのハ風ををぬふ
勢あるハと云ふこと

あつしと門のまゝ

芭蕉

果もいふ句の余情をくして月あししるを門涼といえり
あつしと門のまゝにして氣系あり

二番のまゝともし果さば穂ゆきて

去来

根と辨と見て果さの井をいふに都鄙と益根と月轉ん

所くちたらくくろあ一牧

北

いそりけのさぬじ農家の起とませり

此の師ハ後しんきくん不由さよ

蕉

奥の月一も本房あたらふと見えや

たこいふふ〜まとき恨さ〜

去来

旅あのみさぬり〜まといふ〜の持まを〜こころは自他の
憂と〜

草あ〜ハ桂こハかろ夕るるれ

北

換骨の際〜か〜あ〜いたる小僧の風情か〜こち
あかり〜く変化自を〜懐き〜

さのま〜りハ灯ゆ〜す

蕉

子奪み〜てかを女小轉〜ら〜之始然〜る〜

道心のた〜ハ花のほむむ時

去来

こ〜し〜火小童を〜観せ〜ら刺こわち巻る起り〜とさふ
とさ〜えて伊話と〜〜未だ〜り席〜方〜こ〜は〜てお紙の倫か

能の七尾廿多〜位〜き

北

さふを識悔ありた〜と見えたあ他人の起あ〜と〜かくら
い〜るせを解〜く〜の實あると〜〜〜答むけの伊を〜集み〜

きこふおとす申り ○ 春のさきをうたふたふは夏他の舟りてまうり
余情あり

奥の奥の志ハ物あまの老を身とく 蕉

まき若の人をさしたまは目さしあり魚の字ハ自他を明かするの
別とまらぬ

待人いれい小待門の益 春

奥向の門番も階あせり

之かゝり屏風を倒す女子を 北

自他ハ更ハ迷儀の情とおえる姿との差別あり

湯敷ハ巾の簀子巾いゝき 蕉

其物を湯たうといひんさしハ物とまらぬ自他ハ浅なるの
別あり 越ハ益のまらぬとてあはれと驚かす

苗香の更をとぬきの高は夕あり 春

さしをとたまき

僧やしとむく寺かかふるよ 北

猿虫のさると世を渡る秋の月 蕉

異様のものをさして情態あましくかきや舞踏といふは
詩文ハ舞のまらぬとて一さのともやうあらん。○ 4月4月の
利あはれハ夕嵐ハ舞あり

年ハ一冬カ地子とらるや 春

そらりのものまらぬ公役かもしさるの世よといふや

五六本生木はけしたる 蕉 北

地子とあるの地水換の記述と申但一考の語あり

足代衣物よこ八思かよの及 蕉

返きて早き馬廿日持 来

て川ちうのふ水こち 兆

二分一林とんて附たん

戸障子し窓かこいの膏や 蕉

サ味ハ〜と味いあり

てん志やくまもりいつく色はく 来

あゆみあまきをまきぬ教あふかりう杖とりう管橋ふりし
まき橋あふり

こそ〜とま鞋を他る月あさ 兆

杖とんて着まき風情をいさわ

葵をぬるい小起〜 秋 蕉

後附あり老農のさぬえ申 〇〜し後附と附分とくはこ
あふを味いこよ〜 下 倣え

そのまの〜ころいさふたれ外落 来

此回分ふたつハハくれこちりも板子の二種とあるハ去嫌を免れ
而も去嫌あり但こち去物の二句片づくの詠ありとさふんてハ
変化敷〜あり〇後附あるもの毛を去りハハ去嫌ハ去嫌
すよふあるとち去嫌ハ論ありをさ一例とせを

申かこて蓋れあハぬ半〜 兆

ふたの合ぬハ風の利しきりるを癖あり〜と再再和せさるる底の
言ふ起〜と様分を附らぬ〜り

草庵より暫く居てハキヤツク 蕉

笑い〜いい出あいらん

いのち嬉し〜を撰集のさた 来

れ阿西行おとの函屋と見え附たり

さぬ〜よぶりりたる恋よ〜 北

と奪あり〇その分を小町の老情とてめて思ひ〜
花の色もくつろい果〜越せり〜此と心あま〜て何たり
存分ト其名をいり〜て補いあま〜る後補あり

浮世のよとらとかな小町 来 蕉

二句一さし〜二句依り生後の例あり

かにゆ〜ハ蹴ま〜るみも候〜 来

後ふれたる老女みもの振あ〜あ〜申り〜と尋る解余と
流かり〜但向附り〜て自他分明あり

おぬ〜とあ川ハ廣き 板又 北

左遷の泣あと〜申候きり〜風情あり〜をお尋〜ておかた
解あり〜但かくい〜と嘆息のこを尋〜子ハ似たり〜とよの老
のぬと〜と見たる句面の詠ハ論あり〜

よのい〜ハ氣遠きるおのう〜 蕉

句面の詠論あり〜といふを左遷のこの実と〜刻〜てあか
解と附り〜と格様虚實のちま〜とし〜て早き換骨の附らん

かま〜く〜ころぬ盆の祈むたさ 来

旅ま〜る人とも見え〜い〜

○

灰汁桶のま下やこくろきこくま 凡北

製合所 枕俗あり ○もくめの寂實の并實あつさる
をあげてはるん

あふかすうて有る夜まる秋 芭蕉

一ふく混せん二かくて舞とん

新玉あかりなる月氣 野水

夜の静雨さう後降の二方一解とせうさしとさしを轉ん
移徒まのあちちあるは降ちの伝信ちといふまじやうあん

あつて娘く十廿さうはま 去来

子奪して其をたは製合所あつせいと川と人倫をいふを
たは

子代孫くま物をさぬく子の同じく 蕉

子たまこかと十圍鏡くまろく雲上の掬扱あん雪の
真の轉せうをさうをえあふんあつくといふを

雪のまみたりく雪物 北

小松の系とてとて雪といふく
取く後分の武備かては ○前分の文雅ありて

紫出くして眩みたる春の弱 去来

遠空くもく

摩訶耶のま根みさく九かれる 水

ある人との愛を難に思ふくはれく川子の鏡ハ馬上かきつて
身はけたるはあつてめく魚するものあつて申難くを并ある
み比せん ○摩訶耶のま根みさくくま古梅の地

ゆふわ〜丹かきす〜冷ら〜ゆきまのま 北

昔おちの光景と見て言根ある〜さし〜や旬花〜さびあり

軽クイダの口ふよかきこ〜氣味よま 蕉

貴とをく賤とをく通せんといふことあり

ものたれいさふと忘りて休む日 水

〜後降の二の一章〜。由良のたまを憂ふことあり

近せ〜き〜感〜りのみ 未

忘ぬる〜あていと〜あまの宿下り〜降あせり〜手集〜と却てこたへた〜一章と後

令深と人よいら〜身のやまよ 蕉

我らふ熱傳りあつて他の不偶をうらやむ格あらう〜一祥人かいつ〜十の熱さなるまはの表裏をあらせさ〜んやさハ實ハ隠せさるるもの候と〜をあらうを甲子に〜二分面ハ自他みから〜。令深と人とおせさるる底の世話

あ川風呂まきのさる〜の月 北

令深の熱を却却〜て爽茶の味いさ〜ぬ熱熱仁ゆあせり

所内トの秋も車申くゆわ〜ま 未

あつた〜風呂を授〜あるま〜て世間休するの熱意〜秋の字をかりて〜おた〜るまはまあり

竹をたふるみもやゆをうら〜 水

所もま〜り〜み梅〜ま祥あるを〜友か〜園のゆらま〜と又あ〜こあ〜る〜風情をあ〜いせり〜帰二〜一祥をい〜

花とちる身ハ西念り衣きて 蕉

あき人あけり人おとの習う日つめ有さぬをのて定か死
世を祝せし越みあふを朝あうと季ううの自世をうし

木曾の歌蓋ふまもく風は 北

花とちるの風流くう兼将とい越向せしけいとせさかたう
丹もああることありて木曾の麻衣あさくのことといし
一首を殘せりうとそ家持みくそ表ふりし

かえる下山陰はたふ四十雀 水

築さす家のむひをかりしと表 未

書ます4返るる八月山陰み兼将を八神しとせさる人々
木曾み築を根を擧げしとせん

冬空のあけみ牛たる小下馬 北

旅の馳をみ有明くあく 蕉

さいしき解み雁せり

まさあしき女の気あしとらんかくこ 未

枕双帝み清々納言宮み遊いしはしとせて生目らうみある
し册于定國らぬことをもて門の株をを解たその女を殺かて
けるや枕をのいふりあはかみ母いよれることありか風流
をあら越向したるをを枕中の指板をとりし

何おもいくさ狼めちかく 水

比無の海かここ二つ一三言あり

夕月夜忠の共宮子のぬ廟守る 蕉

あふを實として啼し出しき風流よりい

人もわすれしあうそふの水 北

關伽傍ある也

嘯は手子自傍いせせておろし 水

新伽楠の空しきをみて思ひやりたるさあるんか二句
あを考へ

又も大草の穀をころし出 水

自傍の人のことよりいへば僧上男とて申

堤より田のちるやきこいさきよを 水

水よりけのちやく小轉せり

加茂のをしるよの社あり 蕉

そよ長堤ありつり感き

物くりの尾をりたらく名系をて 水

中句を併て新置の家居のかたこなたに叙極ふるくすめる
と云ふは申姿先の松柳味つて名系の清はさきを掃ふらん

るのやとりのせを迅 水

晴てたち行さぬと見て一樹の後の急かあかくはる
さぬハハくしちるを叙せし趣み所あせり

益杯ぬるまを後られ身九たふとさよ 蕉

赤紙の餅酌さる情乃まつ雲袖の面壁を比興しいるやさて
人乃の二十年しむるさるあるみ勿くして世は片らいてみ
さうあをよまの境界を兼ふまほあさし一筋下の赤虎糸の
まよさみ唇をさぬをわあり杯に人乃の自表をいおも

まよろくいのみ世のなよくらん 水

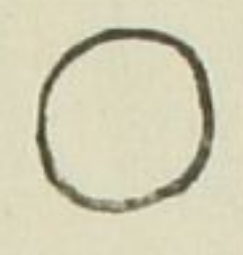
まよれちとて所たるまよは比興なるの證とまよ

糸さへ抜いつてもいふはくらく 来

當川の正論か曰花は極ありん極ありんさるまはつんと極か
けさささき花ありんせし一葉とありんさて後分花ありん又を
ありん極ありん付ありんさるまはつんとせし二花とありんこれか
の牙仙の公武を戦へしきうりかかしてこそ秘訣の大事ありんか
傳へさる人のまたりん論はるもはしあらんかか後まか
候るとい探さるん其集の自傳と見るる

まへと二月あまき木のて 水

くつりいふをかた



錢乙品東武行

梅あせままりこの宿なりころけ 芭芭蕉

お茶のま色を思いうちやめるまありん 魚谷の集 雲ハ更ハ
句の殊極をさるころけ 但むりハ後 辨ありん 幽玄を
もてもととあせりハ極ありん 〇おせままり候あせ
のころけハ抄ハ出川ハ友ハ暇も

笑あたりしき春のゆけあめ 乙列

多岐ハ海といんといふる

雲花なく小田ハ土むつにありや 陈碩

農夫の着つれたる風情ハ 轉ハ句の虚實ハ 候ありん
すいハ物ハきのきをし 適さるといん 〇ハやの字持せと極ス

志とたねねふて下さるハ 素男

染ハ淨茶ハ 伴ハ保ハ 但ハ用ハ とも糸ハ 傳ハ 物ハ 川ハ
社ハ ちとハ 綱ハ 一ハ 階ハ ありん

行隅ハ 去 菫ハ へて 羊の月 刀加

まそへけも敷くゆつらん

二階の空もたちしきよれ秋

蕉

秋の一字のものを林へ別はし人のまぬる筆情有るある姿
のまはせぬしきやなくものを思ふらせぬあはれの内装つと
あする舟問の女かるとも由あやとよ

放やるくつ乃跡ハ見しせん

男

さす舟のまを放門の跡あうそれる尾のあまの指さくうの似
くつ乃跡中あうかくまの換せし筆情舟中まをて実あやけり
稲カ茅木のいれ力あやの勢

碩

平因木香こしても悲しき風もあはれ實をよて虚
とまつらう

あつ志この神免み越る陸麻山

蕉

くまらうとみいろうと風情力あまの語み出川菅西行
あとりく小西のこもころ

内蔵流りとよぬも夢ハせり

和

無女あとの追ま来るあんらうのたる姿服下みあうこと
但系流の人とも見えは名をかせとや

糸の別カ箕のよみま並ふ小西方

碩

後と布たる神の。小西の氏。のあふの語を人
かあもくかめ接板と見ているあや

すまきしるねの静あうりり

男

瓢姚う軍中似たり静の字妙し

萩の札まきいぬの札みよそあ

和

苑中と見えあふし萩か

雀かたよは百ちちの一

和月

指を弄せるの指板とあやを起していきわいあかきぬを
いつたをぬるの舞の近きとく比舞せしむ

懐みもあちむる秋九月 凡兆

是し又あやを起して男之の梅梁をと呼ぶものよふは
せよよをわいをいさや

夕さたあぬあかはははは 凡兆

海士や衆人のまきまを公衆に扱ふともし

陸の柄もまきかしたる花のくれ 去来

後海をさふ扇りまもやくかと見るとさうり
あ川と長程あ川い合くれば月花は海舟かして
波ともみ解さん但はほまふみ伶かふん

灰まきちちさかしき菜の端 兆

川をあたみいし居る住人の風情は特き
然しを時風の海ありて月解の夜とらふ

春の日は仕をてかえり 正秀

灰をいさふのまきして春の夜あり

床をおくふ侍のよふわし 去来

敢て侍の侍をいさふつら法業は穢かと
侍の侍をいさふ

汗ぬくじ鶴のまじりの結の糸 半残

いひ争ふ床の糸情見也

あつ山せしき難れ下 土著

高川物と云々世にきとハ似川く作情日夫を

大徳小思いんは川ぬ意を残

あふと況暮の長小所をせり

身ハぬ川帯のころ不あを言

うつあき女のさほあ人二句一言といふ一叶ぬ意
換骨一打越の論

小刀の蛤丸ある細工残

皮通を細工と唱人蛤丸毛を外刀の姿ありとを意ませ
しめ小所あせり

桐小史とほん大年の夜園風

素人の細工集か転ん手桐ハそ月をいり句他寛し

くくわとハたもの使も次の浦猿鐘

每逢佳節倍思親といふ意ハ似うさまい人ある一
○源氏伝のき小波うもとよまるを地うことあり

む糸うち合勢あたるかたきぬ残

きくそ人の秋情をい川と暮愁をぬくゆる句仇の如とる

この夏もかあををるの庭風

は時の作情を弁せし青雲の志をしと付凡空く月日の流し
を歌くさあうさハ来政の権か抱くてねしを速られし意ハ
表せり但かくいハ述懐の意を打越すハ似た川と姿をとりて
又る附ハいうるを論ハ飲うことか

将酒油杯させて志ハ一月又は鐘

ふれハ似人態を打越かろう早の足別ハいふも更ハ情を
姿ハ換骨せし一打越の但姿ととるの意をして却て更ハ情と

おせり山例かき廣の自五とやいど人けにうあくまある案波の
花のこつりと周法

嘆きの懐いちつき極片たい

廿方

涼しさを合負ういさう噴き居たるとそそ人静まり
光景をいこ

涙しそふおとこくめんを顔

風

こくめんは未順の貌。おふの襟振中膝を起して杯を走すぬ
女房をいさうなみ降さの置不置とそそし一夏に秋用と

秋あを後をぬいたる會はる魚

嵐井南

望師の牛子と結してあふとい他たふし

うすをから作り九割下結

史邦

浮海あふしの竹は居るさかきう海後のうつとよす

ふか又ことしの速も定らぬ

野水

け下結と物人の具と見ても後あるけきこよ。雪や秋波の
山の吹はらしむかかふるなちをいさうあふを餘のふの白とあし

解めたもとをはるま風

羽紅

女中み換ておんあふのふせをいさうあふは古のたあふ
あふ

俳諧古今集之辨始終

俳諧古集之辨 終

羽陽 逐日菴辨

山灰依集

梅り香りの月と月仕出る山後外 芭蕉

かの核本全をそりしり細粒の留るの凍ふとまたきて
小よいかあひけん

ごころく 子雉子の啼 たり 野披

句仍み巧きを月しりまの字ちうくあり

家並る法をまのふ夷 子とりをて 全

揚の風調のあいつく 殿を彫の音流しけり村屋のまを色み
しきあり

上のふくらみはゆるぎある赤め直

蕉

さうるとせい死句あらん

香の内もくくとせし月の雲

全

根のおきあげとせこあしらひく人掃掃自在とふし

公教越もあは秋乃さいし

坡

在るの氣やすきさぬあらん書し又勢あつらんし

此既一筆もくはるくわいハくさ

全

をま所とえて所たらんこあたは公教もとみ徳個せる風情
ゆして木のうみ金木の交あり

根をかたし人よりあはせぬ

蕉

芝草を叩根の名か起し控を召引て病あつたつと弘めを
る神小階ありあつた二句一筆あらん

素良のよい詞しはるある細き子

坡

根をまひせぬをま家と足てえしも商人の越向を役け
くやむ情を合あたらんを自他の交の素良をこの徳
ハ仔細の純何の面氣ありてねをくしれは深きし一息をかく
せうさい二句のるは徳性といはん今妙く

はとくはるひのぬしぬ六月

蕉

さしし高きものあつて月あり

顔ききたる味もくくみやる向河春

坡

水調の自由をいふ

いたといひ出すお代夜のこと

蕉

とそめ月あるを年回と見せいで出たといひし

終る月尼の持病をあらへし まじりた 坡

旅あとも病を養ふさぬあんな長ふし 但在今の人のかえたり

えんややくとかり 孫衣名月 蕉

曉ちかく酒盛を収きたん 終中紳も終せし

えつ屋をま掛下地あてんは 坡

孫酒も船あをけふあんなあふと時日を異ししたるの仇略あり

せ飯を相くめし うた 合いとめ あま 蕉

蕉のまを川
よよの依が
かくて又ま
さく下よ
不れよ

所へ石のたしと砕てそのうけ 坡

土藪をかきまの葉と替へて見る方のさぬま

門をあさうし 土生の念仏 蕉

在所のもの様をさうしやむ必書を合あふしと人論の異れ
あまのう依のちしをさるし 但はま武を標のねともしり
の徳うちであしは物さる血す

東風はなれ ま 蕉のいま川を吹まひ 全

土生ちるの園中し ○は降二方かきま似た川と合くあふ
の利といし

まうにちるま ま 仏の月らふ 坡

田家のこい月かとの曲

江戸のたねむらしの身くらむららして 蕉

店もその樂するたを越をありしくいつる按撫みふくを換骨
強くくぬく

こちめもい川とから河をのす 坡

世情をたせし二句二平し

ちく十束の内せかひの音 蕉

向のいそくくを用をりつち底の神あることを得ま

桐の本きく月さの申るあり 坡

門きぬそふまつて森たる面白さ 蕉

あまねもまきき夕をあらん強急の人ちととゆさくといひ流る
といえよとをのう明なるかどうて強向せしん也

○向と十夜の二句を益と見えしめと本集してあまをばけ
ぬるあり

いらふたきて木衣のえきまぬ 坡

いやした面白く転る捨ふかたまるの伊かぶとあり

とつ年み女座のおやこ振舞 蕉

と本集し

又このしるもよよぬ空 坡

縁ふはらゑあぬ者も入らかん杯たる指搦かとおあま
余情あり ○又の字去年をぬぐり

法平の湯治をあくる草さるる 蕉

おいさの身あふあとの水縁ありてかくはく川に居る風情ある
換骨のよけ作感ぞ

かひもを下りてまきまのちよ、
坡

このふしも東のすまふをを安まや
全

か海境のおどろふか、
急な良村のしやうやひたる

奥小喰あくまぬの競ふ、
蕘

あふを漢村とんるといやましく、
降うのあそを海すること終

子をなく一棧く、
坡

客中の懸ありとてて夜の雪まき、
かきくあふくたりや席懸

未進の高れとてぬ、
蕘

貞抗の事あり、
〇ともぬの侍あふを結く

降しもませし嫁をといふ、
坡

せつろくを世きまを怪れるや、
〇元のをあれむ嫁の信言を

屏風の障子ア申はる、
蕘

まう抄ハ変化のうち廿曲をハして、
た川ハまみハよのつみの、
まといつ、〇ちよとねまハなるハやうハ小物たハちを天國のま有る



三吟

善好しむく、
嵐雪

かくとそ風流の世控へし、
秋や、まき色を雲天受せる

あさこや 昔々 雀鷓も 野 利牛

花見み守たり 曲平み流きとらふ

斤乃いまきの小坂めかたまりて 野坡

あふのしやく 行客の送定あとも申

舟をさまくみかへの相撲場 雲

賑いふむる世るとてはあふん

おろしと 菊日こそめさるの月 牛

み庭をい帯今とくまつらふ 姿とて果たぬ政めさい

早稲も 晚稲も 相生み 出まぬ 坂

子奪し におきいとしく出るよこ

泥凍を 長き 流みの せきとらん 雲

海をそくし 但益良の 夏あり

あちこち 生川の 益の くりり 牛

お金のらんぬとて 自み 所たり

はらひし くらく 娘を ばな 来た 坡

益の 利あり

とくし くらく 笑える かいりり 雲

下女あつんいやし さいさぬあかいとくし 葉あり さらた 葉
の 出た いんが 作 摘たるとなる

黒谷の口と志津の里と後院

牛

在雨の名をかして白田青くたる風情も静け

さるのかきかをと二ふかえけし

坡

昔はたうのさびをいへり

徳貫ありわの跡ある雪のく

雪

年陰のせやくにして静寂あり

人のさくぬねくろむあ

牛

さのおとく伐木制禁の地ありは降雪も木の梢いと

難役の執をあるせは日々川

坡

木狭まうぬ残る庭樹と見て眺あるを先をいへり

叙の中ある羊をほは月

雪

衝くともほやこて秋のうせ

牛

鶏双りてと又軒かく

坡

ぬか床たるの利ありて紙の巻用あるが致せし

奉り公のくはまて敷かきぬり

雪

抱あゆる思の小便をまは

牛

床あめり際あるを湯屋よこしたる水も女も静け
但今依り若菜の道を往くは海換骨かて去紙の静か

くいたくを河内ぬ春物送るのみ

坡

うしろ階こ　〇わんをうて抱のAたる解か轉せり

心とくあり　筆者の洗　流　雪

富家あるれやうか似合せるのまを川と姿みちて解の階
あるは後分か相をいり

壻り来て娘の世とい成りたり　牛

こと　れく川と何れ　羅ハぬ　坡

親族ある出入の者おとの後る意味ある蓋二方うら
みして自他の愛といふを　ねは監あり

今佛のこゆき　佛はとをたするら　雪

本言桐子のあり　云ともなる　〇ゆきとたするら
いま佛徒のねもくさうせんをいりかたののうらとあまを

けういんの小きとをよされ　牛

入佛や回向をとて比無せらるる人倫のまをいふ

黍の穂と穉く　凡風み吹倒れ　坡

馬場の喧嘩の詠みす　月　雪

起情あり　益ありきた

かハとく　に戸て人みある　牛

不と物り　意味か轉せり　〇若急京のまはくれたる出入か
この其場をうたせ　者もあまたありん

今み　衣をのく　ハほとき　に　坡

敬師のゆきこの廣く　さる起ある　二方一毫か　その月
士農の愛あり

賣子かぶ打てさせたるたき心 雪

車の熟するを待つたる慈意あるを熟の斟砂み枕物
しそいつくさるは分辨の者実み夏あり

いらりくと舌の障か 牛

自発の味いさかのうた

籬舎の便きさうせみ走らまは 披

異名あり 地名もやうとこる

かしたふれきりぬ細川 雪

猶ある母をきこめて花のゆ 牛

幕毛纏もちりちくはる孫まとい 風ふこみ孫用の
夏あり

またのじある正月ち餅 地

まづき中ちの孝りと見え附たふん慈意感せ



ふり川井まうりて

空をのぶさきりり麦の露 孤屋

あくしむ麦み世むの絶えあるしとみ送物共のよ柄をのきて
いさくみ自己の便きを用に但貸おのさいをまきせしるは便徳の
風骨とりふる 蘇おをを出さみみめては

盆の水鷄のまじる溝川 芭蕉

上巻を通さぬ程の雨ふりて

出水

毎日々轉りたる雨自れをあらん後句ハもとく晴天のちやうあり

そりとのきけハ酒の家中

利牛

節ある日をききのと居たりんそつとの後葉情あり

森不難も祓て居ぬ宵の月

蕉

おきくそ抱いしくはるあるくおとセ夕日のあんの旅いと後ッ
んかして越向しあひけんをあらんおちたりんとりて

とたりと森のころぬ杖風

屋

折ましく事ある折所合の死法を考ふ

きくく次世歌の下きく鳴出

本歌をよみたるの森ととたりん句居あるやうあるはなを
○使ハ夜下りてそそ合を深居りて次とハ鳴くこの夜をハ限る
さしハあしし夏は後句の悔を綴せさしんや

咲の仕事一カユまをさるあり

水

仕のハ世新ハ利あり

妙をよみふりりわハ

屋

よみよの種あふ中より流出ん解さしと未更ハ似りて
ユまの二字を後たり

偽都のむとつあつ冬をやあ

蕉

夏ハ偽都の名と出せる法越向とりふり夏ハ新用し

風ほそく東明かすすの晴ハたり

水

家のかゝれた跡をいふ片く 牛

あゝ漸く晴たるふせんと見たる物依りてさき
出るあんとん自れりあをかくは神利也

鯨汁にうん者をうよくかりて 蕉

後附の二句一章といふの傍義小本御かたけたる自後また
まのゆけあをさぬあまの川流のぬる風情を換骨の妙

糸の質をさけてくま出せ 屋

高のくく飲む小轉せりも奪也

いよまさとさやの静し 牛

空みあしうらり

みれし柳を今みあしとて 水

是らためかくれを羨ふの傍梅のうさみ等く
の海を足尺所を羨せり けを二層梅とまたる縁
飾の自在有

雪の吹たけりたる嶽 月 屋

おもしろく思ひおたる風情ある

ふとんをきてもこの思ひに枯れ 蕉

儂儂たるまき育み思ひのさぬをよせめいりん
たると語れまた利あるみ似たり

不毛を隣と中しはらるるあり 水

後附ありの傍あくをあとにいけん
たると語れまた利あるみ似たり

もつち指をよよあうり 牛

又小妻月の附あうりよかたは雅美あを
俗情にゆくの原也

○世故傳
ふとんのあま
衣をよてい
あしうらり
さきでけり
たると語れ
また利ある
み似たり

世世々
かろしをむ
感懐を身た
あつた

はるのいそりみあまの浅ちふみ 蕉

くしろ階の二方一をとりつゝあしそりみの語を考ふるみ郎
中の孫の君あとなししまじせたる綾う休家み取のこごとく
のまこりりくち源をす掛柳あふん

眉はまじれたるかみをも得ぬる 屋

そへ毎月ある浅き生を色として物あまむま何なる
ふとれあつたる神とえて越向したるん

若のまのまきくへて麻川ハ汗をさうま 牛

まのをまきくへて汗といひつゝまらしその字のわさとあまぬ
句依のよさをあまきくへ

空をを送くてさしけ何処を 水

神對面なる花女ともなふん例の字奪をりこみん態を
いふ

今のるか雪れ厚さをいへて見る 屋

今のるか雪れといひさすおハ杖あふんハおのうりて夏有
帛の二方の姿を觀せハさきえつる

年貢もんとたとえらハかり 蕉

雪れを年の故種あるまの越向しあひんしハ縣令の
巡見あつと申あふんハ実をこあたなる所ハあふん

長災み祖父の白衣あのためたさよ 水

長災み祖父の白衣あのためたさよ
をいへる人の変化をいへては分依ハあむ
るの類し

堪忍あつぬ七夕あつてり 牛

田圃のりちハ居たる風情をいへる

名月のもま合せつちをす白田 蕉

早もまけさるものぞ

まじりりて荷の落船 屋

まじりをばしりて荷の落し降させしに季を拵くの
あをまじりて後ちん

このはと宿の通るむすしは 牛

昔杖の光景

山の根元の伝かすうちり 水

寂寞をききせく

よこさめろよ 風の吹かす 屋

夕時を知らせし

晒のうし雲雀さしはれ 糸

日ちとんを降たし

さ見えと女子斗うはれきちて 蕉

人備をききしりて久し女子の懸白木のうみ編りあり

糸の草かき 薫たんか 水

夕竹のまわりのみ狝利のまありの初のことく外を狝利
きたたれと轉々まじりてさくかたは後味を

○百韻

子ハ裸父とて水を早め舟 利牛

たゞ莫言直の姿かろく農務を情心の余情あん
○てりしきさうらともしりふじとの疑衣ある

雪のいせりのま自れさく

野坡

舟の人ちまうしあ

雨あくり救除くけ鳩の啼出りて孤屋

ぬ後のあつさ舟更きたると起せく不転あり

よ力所さうむうふ西のむか 牛

竿竹み柔いろめ細たぐりよせ 坡

ゆよせたる疑をいあん

馬もあれてゆめく人ある 屋

匂る舟女のあいてるさぬと申

雪の月干葉の はんか 牛

人々の愛を合せてや一冊の風情をいりて在るのさる感

掃も跡のし檀ちるあり 坡

溜くけ捨てて夜舟下居たぐり唐さかると申但焦はく
奥み転せり

ちりぬきの申してさう舟も羽平多類赤 屋

賢みゆや来たぐり足輕町あるといふとやうあ

坊さ舟あ川とやとや 仁平次 牛

祿つを附たる死活を味あ

ね板や矢川へせいさう通 坡

不用の地中位るあつし本納無我の姿を老并かたつを情
態を寂さてさきさきとたたりたるもほほほほ

吹るし隙もはきき 窓のすぬ 屋

月もまきけきハたつあつしはききとの熟あはて一房の余
情あつたさきさきとたたりたるもほほほほ

十二と并の衣羽衣の打そろい 牛

十二と并年敷をいふ年友の暇ハ紅あつし 追新の夜あつし
よそわいあるし ちぎれはのるし情あつし

本堂も〜るさきととろ〜 坡

八梅あつしと〜あつしあつしあつしあつしあつしあつし
とち〜あつしあつしあつしあつしあつしあつし

目のあたなる方にあつしあつしあつし 屋

子度めつと〜あつしあつしあつしあつしあつしあつし
いさや

き〜き〜あつしあつしあつしあつし 牛

果中の光糸と〜あつしあつしあつしあつしあつし

近江の〜あつしあつしあつしあつし 坡

夏のはなと〜あつしあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつし

天氣の相よ〜あつしあつしあつし 屋

旅〜あつしあつしあつしあつしあつし

生あか〜あつしあつしあつしあつし 牛

一口の漢をいふあつしあつしあつし

棟の突おつるを根くさる

坡

すくうれは度は山はたあぐり

屋

一季も通るまらもなまか

水氣伏ころの人乃そははく

牛

菟たちたる怒情あり

ほろくと二日突のいおい出

坡

多病の人乃世をさうやむ情あり

わろくあへの根みこなる

屋

ふつりか居りめ

かい袖を物つて身もあおむい

牛

かい袖をぬると外見を飾るの儀
あふのまの
掛櫛は文あわろくといひこるその類々情を起すかい

あを世後をやく窓の婦の衣はをいひへ換骨のさめ
越の備あり

葉羽の糸もよみはうけ線

坡

哀情を換骨せしむり打越をさうね袖をさるの類々
窓干はくはまるとん

西か武士の衣の法とい

屋

よみはうけのまを替す

あまのせくうり合の土果

牛

遠川の水も個あり

あひの教

後二木を

付衆袖を

毛をの

そつおの

わろく

あひの

その

後人

か

はた

あふ

行

切替の喰たをくたる極はきし 坡

くまの納るを仕こむ炭屋 屋

瘡目をまきしうせとも侍ころ 牛

不化あるは

みぬてすけきる下駄のきたまき 坡

のしきおらく風情ありきたまきの結あり

皮川あいの名を綾 屋

○牛 牛結してきまのまきより文友結牛早結の風情をまきし
○牛 牛結してきまのまきより文友結牛早結の風情をまきし

ごありの表のまきま井のしと 牛

すかちと小作の底のあはくあはく

美の月横か負くる古きし 坡

あはくはなもやくあるまきとはいにくもあはく

すいまの長乃あまのこりてん 屋

牛の背の結をいり。あまの結ありまきとあまを
役けてあせり但あはく集情のこととてあはく

いつろくとあはくはく津大寺 牛

市出の和糖をまきし

てかか 坡

仕きまのくさあるは

伐をく尺板と柱のすれあひて 屋

杣小屋の柱が衰へて倒れしや

赤い小窓とあたりしき内 牛

と奪あり

濱とくま宿の胃が竹をかえ 坡

師走比丘尼の佩のまじさよ 屋

おまのいんを通し風情しとあふは袖小片く指板あり

係指の白と赤く買かえさる 牛

天波の杖を又ハすれり 坡

けま章おふのまじりし紐さる所あり

廣袖をくしけい川せむ取の者 屋

ゆもいとそ糸むあふ糸をくしけい川せむ取の者あり

むく起りてまのいし尻着 牛

燃さるる上義も尻もははる 坡

おまのいんをくしけい川せむ取の者あり

十にめあふの物もまのいし尻着 屋

足せし猪もいしと下し尻や物油の小窓あるとし

月をしかきあけ板の杖もかり 牛

車弓を解て所の張のハつて子孫にたる光系と申

弦打おろし 海老のこぶ桶 屋

舟をくみさしんとする風色あやせ

株嫌よまかふことなす小起りり 坡

肩をくみある次と轉して床よりし体も降たり。○吾様の生
長きる次はかみ竹取をこちとりあ唱あり

小益のこぼれ空志つりあり 牛

小益の素を何あの用あ川の後分は其の静あつ降たり

極端の勝たるまをあげかして 屋

湯の待りけと念い川て名成 坡

